

六朝仏教における空と有の問題—廬山慧遠とその周辺を中心として—

東方学会秋季大会 2021.11.06 菅野博史

魏晋時代の何晏（?-249）、王弼（226-249）によって貴無思想が流行したが、裴頠（267-300）は『崇有論』を執筆して、無に対する有の優越的地位を主張し、郭象（252-312）も有の自生を説いた。このような中国の思想界における無と有をめぐる議論の後に、仏教界においても空と有の問題が盛んに議論されるようになった。

晋宋時代の仏教思想は、般若学における空から涅槃学における有へと大きく転換していったといわれる。このような転換が可能になった背景として、般若の空が盛んに議論されているなかでも、慧遠の法身思想に見られる有的傾向が注目されている。具体的には、鳩摩羅什（344-413/350-409/?-411）と慧遠（334-416）の問答（『大乘大義章』〔『鳩摩羅什法師大義』〕）が資料となる。また、鳩摩羅什の弟子である僧肇（384-414）は空の意義を哲学的に考察するとともに、第一義諦を解釈するのに、諸家が廓然空寂であり、そこに聖人がいないとするのに不満を抱き、もし聖人がいなければ、一体誰が無を知るのかと言う姚興（在位 393-416）に対して、『涅槃無名論』（真偽問題がある）を書いたとされる。道生（355?-434）は、鳩摩羅什、慧遠のもとで仏教を学んだこともあり、僧肇ともライバルであった。彼らは大乘の『涅槃経』を知らなかったが、道生は闡提成仏説を唱えるなど、『涅槃経』と深くかかわった。道生は空と有をどのように捉えたのであろうか。このような思想史の流れについて考察を加えたい。